

嬉野町吉田2号窯跡

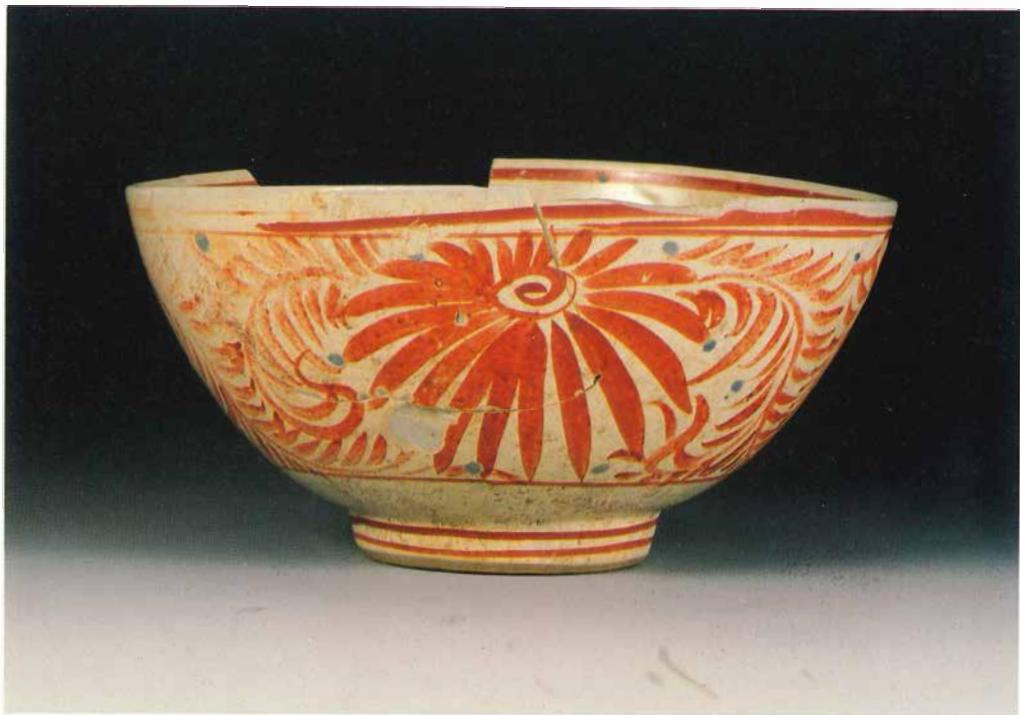
—肥前地区古窯跡調査報告書 第6集—

1 9 8 9 · 3

佐賀県立九州陶磁文化館



1. 色絵大皿(吉田2号窯物原DT-CT出土)



2. 色絵菊唐草文碗(皿屋遺跡横道丁4063出土)

は じ め に

当館は、昭和58年度から62年度にかけて、有田周辺の磁器窯を中心にして調査研究を進めてきました。その結果肥前磁器の変遷の大筋を明らかにすることができました。しかし肥前地区にはなお多くの未調査の窯跡が分布しており、それぞれ独特の内容を持っています。よって63年度は、支藩領の磁器窯のうちでも重要性が高い嬉野町吉田山の窯場を調査対象として選びました。

吉田山は現在3か所の窯跡が知られていますが、そのうち最も長く中心として操業したと考えられた吉田2号窯の発掘調査を行ないました。吉田山は江戸前期の中ごろに開窯し、蓮池藩主の保護の下に地元の原料を用いて独自の経営を行なったようです。しかしそこでどのような製品を焼いたかは明らかではありませんでした。その製品内容と変遷を明らかにし、さらに、初期の色絵焼成を行なった窯であることを示す重要な資料を得ることができました。

本書を刊行するにあたり、御指導御協力をいただいた関係各位に深く感謝いたします。

平成元年3月31日

佐賀県立九州陶磁文化館

館長　牟田口　尚

例　　言

1. 本書は、昭和63年8月1日～8月8日に実施した佐賀県藤津郡嬉野町大字吉田字大黒所の吉田2号窯跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は大橋康二が担当した。
3. 出土品の実測・写真撮影は主に久保田祥子が当った。
4. 本事業については、次の方々の協力を得た。記して謝意を表す。

嬉野町中央公民館長岡貞義、嬉野町教育委員会社会教育係長戸田美徳、肥前焼窯元協同組合理事長副島栄一、同専務理事小林荒次郎、嬉野町文化財保護審議委員井手勝彦、佐賀県文化課東中川忠美

調査参加者・江口製陶所、副久製陶所、虎双窯、瓊山製陶所、聖秋窯、一松陶苑、松安製陶所、副武製陶所、博鵬陶器、大渡商店、副正製陶所、新日本製陶、谷鳳窯、いおり窯、雄山製陶所、辻与製陶所、以呂波窯、劉美窯、カネツジ、副鉄製陶所、副千製陶所、古田陶器、一瀬ますみ、尾崎芳俊、菊池千枝、久原三和、知北万里、徳永仙子、森田秀幸

地主・大渡鉄郎、大串義男

その他・区長丸田光次、副島典久、吉村剛

本　文　目　次

I 調査の経過	1 頁
II 遺跡の概要	2 頁
III 遺　　構	4 頁
IV 遺　　物	8 頁
ま　と　め	19頁

挿　図　目　次

Fig.1 古窯跡位置図	3 頁
2 吉田2号窯跡地形図	5 頁
3 吉田2号窯A T・B T断面図	6 頁
4 吉田2号窯C T・D T断面図	7 頁
5 吉田2号窯出土品(1)	9 頁
6 吉田2号窯出土品(2)	10頁
7 吉田2号窯出土品(3)	12頁
8 吉田2号窯出土品(4)	13頁
9 吉田2号窯北西部物原採集品	15頁
10 吉田皿屋遺跡(横道丁4063)採集品	16頁
11 吉田2号窯出土の窯道具	18頁

図 版 目 次

- PL. 1—1 吉田 2 号窯跡遠望
1—2 吉田 2 号窯（南西から）
1—3 吉田 2 号窯（北東から）
PL. 2—1 吉田 2 号窯焼成室左隅（B T）（南から）
2—2 吉田 2 号窯物原（A T）（東南から）
2—3 吉田 2 号窯物原（D T）（北から）
PL. 3—1 吉田 2 号窯北西側崖面（物原の断面）（北から）
3—2 皿屋遺跡横道丁4063の工事現場（東から）
3—3 幕末の吉田山絵図（佐賀県立図書館蔵）
PL. 4～9 吉田 2 号窯出土品
PL. 10—1、2 吉田 2 号窯出土品
10—3 吉田 2 号窯北側崖面採集品
10—4～6 吉田 2 号窯北西側崖面採集品
PL. 11—1、2 吉田 2 号窯北西側崖面採集品
11—3、4 皿屋遺跡横道丁4063採集品
PL. 12—1～3 皿屋遺跡横道丁4063採集品
12—4 皿屋採集品

I. 調査の経過

1. 調査に至る経過

肥前・佐賀県内には江戸時代の古窯跡が260か所以上分布している。そのうち有田など佐賀本藩領内の窯の調査は比較的進んでおり、磁器の変遷が概観できるようになった。それに対し、支藩である武雄、鹿島、蓮池領などの窯跡の調査は遅れており、その特色も明らかではなかった。

昭和62年4月に嬉野町文化財保護審議委員の井手勝彦氏らが、吉田山北方の祇園で赤絵片の散布地を発見し、当館に持ち込まれたことから注目することになった。祇園の赤絵片散布地は、既に光武岱造氏が研究していた鄭幽軒の屋敷ではないかと推測された。赤絵片はいずれも、1650~60年代のもので吉田山開窯初期の製品に赤絵を施したものと推測された。当時、肥前の江戸時代の赤絵窯は未発見であったから、赤絵窯が発見されれば極めて重要な遺跡になると考えられた。

それより前に、九州陶磁文化館は古九谷産地論の問題に絡んで、胎土の化学的分析の必要性を感じ、江戸前期の窯で、素地が有田などとは異質ではないかと予想された不動山窯（嬉野町）の陶片を、昭和60年11月に佐賀県窯業試験場に依頼して分析を行なった。その結果、チタン含有量などの点で、有田の胎土とは元素組成がかなり異なることが判明した。既にこの時点で、佐賀県文化課が行なった分布調査の際に採集された吉田2号窯の資料の中に、赤絵素地となりうる白磁大皿があることに注目していた。

昭和61年9月に山崎一雄氏はチタン含有量の多寡が有田か九谷かの産地判定に有効と発表した。^{注2} そこで当館は東京大学構内理学部地点遺跡出土の古九谷様式磁器片の分析を行なう東京都埋蔵文化財センターの長佐古真也氏に有田の窯跡陶片などとともに、吉田2号窯採集の白磁大皿片を、東京大学理学部助手（当時）羽生淳子氏を通じて提供した（昭和62年5月）。^{注3} その結果、やはりチタン含有量が有田などに比べて極めて高いことが判かった。

このように吉田2号窯は重要な問題を含んでいたために、発掘調査を実施することになった。

注 1. 光武岱造氏によれば、鄭家は江戸初期よりの蓮池藩系医家で、初代の鄭遊菴は、字を竹塙と称し、中国から朝鮮を経て日本に渡來した朱子学者・医師という。2代が幽軒（元禄8年（1695）没）であり、祇園遺跡は土地の古老が幽軒屋敷と称していたという。

2. 山崎一雄「九谷ならびに有田古窯跡出土陶磁器破片の化学的判別」東洋陶磁14、1986。

3. 長佐古真也、羽生淳子「東京大学構内遺跡理学部7号館地点出土『古九谷』の産地推定」昭和63年度日本文化財科学会大会発表要旨、1988。

2. 調査組織

○調査団長

牟田口 尚 佐賀県立九州陶磁文化館長

○調査員

前山 博	同 副館長	畠山 尚正	同 総務課長
大橋 康二	同 学芸課資料係長	松尾 健	同 総務課庶務係長
吉永 陽三	同 学芸課普及係長	田中 幸政	同 総務課主事
鈴田由紀夫	同 学芸課学芸員	浦川 信子	同 総務課主事
宇治 章	同 学芸課学芸員	福島 晴人	同 総務課員

II. 遺跡の概要

中島浩氣『肥前陶磁史考』(昭11)によれば、蓮池藩初代藩主鍋島直澄は、寛永16年(1639)に隠居したが、産業奨励を志し、領内の陶業を補助したとある。「直澄は始め五丁田に於いて斯業を試みしも、此地製陶に適せずとなし、先ず吉田の陶山を発展せしむべく、旧領地なりし有田郷の南川原より、副島、牟田、金ヶ江、家永の四人を招致して指導者となし、從来の小窯を廃して大窯に改築し、其製造と販売に便宜を与えし而已ならず、窯焼には物資を補給するの外、門地を尊ばしむる等、あらゆる優遇の道を講したのである。」

その後、文化年間に資本家副島弥左衛門が吉田下窯を築造したという。「文化文政時代より、窯焼は大阪へ直接取引を開始して、空前の盛況を呈し、斯て製品の不足を補うため、從来の前窯及び下窯の外に、新窯が築造されたのである。」

「文政の末年より、天保の初年に至り生産過剰を来たし、為に価格低落して経営困難となるや、……廃業者相繼いで生じ」た。

「明治13年、精盛社を設立した。」このころより好景気で、明治15年には新たに1登りを築窯し、これを「社の窯」と称した。これより以降、「從来の共同積みの3か所の登窯は全く廃され、後年には銘々個人の登窯が新築されたのである。」

このように吉田山は蓮池藩の保護の下に変遷を遂げた。調査した吉田2号窯は、このもつとも中心の窯で江戸後期に窯が新築されたのちは「前窯」とあるのが、2号窯とみて間違いない。

吉田山については近年、古賀敏朗氏の研究が注目される。そのうち、享保12年(1727)の蓮池藩請役所日記を引用し、「吉田山の儀は六、七十年以来、塩田町の商人ども仕込銀差し出し、焼物とのえ来たり候、しかるところ、この度び(問屋変えの問題で)皿山へ仕込銀差し出す者これなく、焼物仕込みあい叶わず、釜焼ども端的に難儀におよび候段、あい歎き候」とあり、吉田山が60~70年前、すなわち、1657~1667年ごろに開窯していたことを示している。また同氏は幕末の吉田皿山の絵図(PL. 3-3、佐賀県立図書館蔵)を紹介しているが、これには3基の登窯が描かれている。吉田2号窯はこのうちの真中に描かれている窯である。室数は10室を数える。

注 古賀敏朗「消えた焼物の道」西日本文化 175—1981、
同「蓮池藩皿山疑獄」西日本文化 190—1983。



Fig. 1 古窯跡位置図

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 吉田2号窯 | 7. 美野窯 |
| 2. 皿屋横道丁4063 | 8. 上福窯 |
| 3. 吉田1号窯 | 9. 丹生野溜池窯跡群 |
| 4. 祇園遺跡 | 10. 志田西山窯跡群 |
| 5. 本源寺窯 | 11. 志田東山窯跡群 |
| 6. 大草野窯 | |

III. 遺構

吉田2号窯跡は皿屋地区の中心に独立丘のように周囲より一段高く残る部分の南斜面を登っている。北側は皿屋公民館で削られ、西側は物原をかなり削平され、崖面に厚い物原の堆積が露出していた。

最後の登窯は窯体があったのを地元の年配者が記憶しているといい、畑の段の状態を見ると、南から北へと登っていたものと推測された。前述の幕末の絵図にもそのように描かれている。よって窯体の確認と、西側の物原の調査を目的に、A、B、C、Dの4つのトレントを設定して発掘調査を行った (Fig. 2 参照)。

その結果、B Tで1つの焼成室の左奥隅部分の窯壁を確認した。窯壁の基部近くの高さ25cmほどが遺存していた。床にはレンガ色に焼けた粘土の上に、暗紫色の細かい砂が敷かれていた。その上にトンバイ(窯壁片)、窯道具などが埋立てられ、ガサガサの状態であった。その上(次)の焼成室は削平され残っていなかった。トレント北側には攪乱壙がみられたが、その底面付近は焼けており、窯の修築が行われた結果かもしれない。トレント北壁際に設けた試掘溝ではFig. 3のオーカ断面図のように下底に灰褐色のタタキ状の面が検出された。こうした状態は窯体外の作業面によくみられる状態である。このように複雑な様相は長い窯の歴史を物語っている (Fig. 3)。

B Tの西側に設けたA Tでは、物原の厚い堆積が明らかになった。現地表下約2.75mまで掘り下げたが、なお地山面に達せず、危険なため発掘を中止した。Fig. 3-7の上面に暗褐色土層の薄い堆積がみられる。これは一時期の休止期の堆積層とみられる。その上に淡褐色砂とハマの多い層が厚く堆積している。これは大きな改修が行なわれたためではあるまい。Fig. 3-7より下は18世紀末以降の製品の出土はみられなかった。Fig. 3-10の層の下部からは、Fig. 5-11の染付日字鳳凰文小皿が出土しており、この10の層から出土したものはこうした1650~60年代の製品に限られる。なおこのトレントのIV層で赤絵大皿の底部片が1点出土した。

C Tも物原の堆積が確認された。全体に東から西へと土の堆積が傾斜してみられたが、III層以下では東半部は攪乱されている状態が認められ、Fig. 4-7、8の層では幕末・明治の製品などが出土した。それに対し、9~12の層では17世紀~18世紀の製品が出土した。また10の層で色絵大皿片 (PL. 4-5) が1点出土した。このトレントも現地表下1.4mで発掘を中止した。

D Tでは最後の窯の窯体は確認できず、既に削平されたものと推測される。しかし、Fig. 4-5~7は焼けており、窯床下など窯体に伴うものと思われる。DT東部の攪乱壙につながると思われる攪乱部分がCT西端部分に認められ、この埋土から明治ごろの製品が出土した。Fig. 4のV層以下には18世紀以降の製品は混入しておらず、17世紀後半の製品だけが出土した。そして、その中には白磁大・中皿がかなり含まれ、それとともに赤絵を施した大皿片が8点出土した。このトレントも現地表下1.9m位で発掘を中止した。

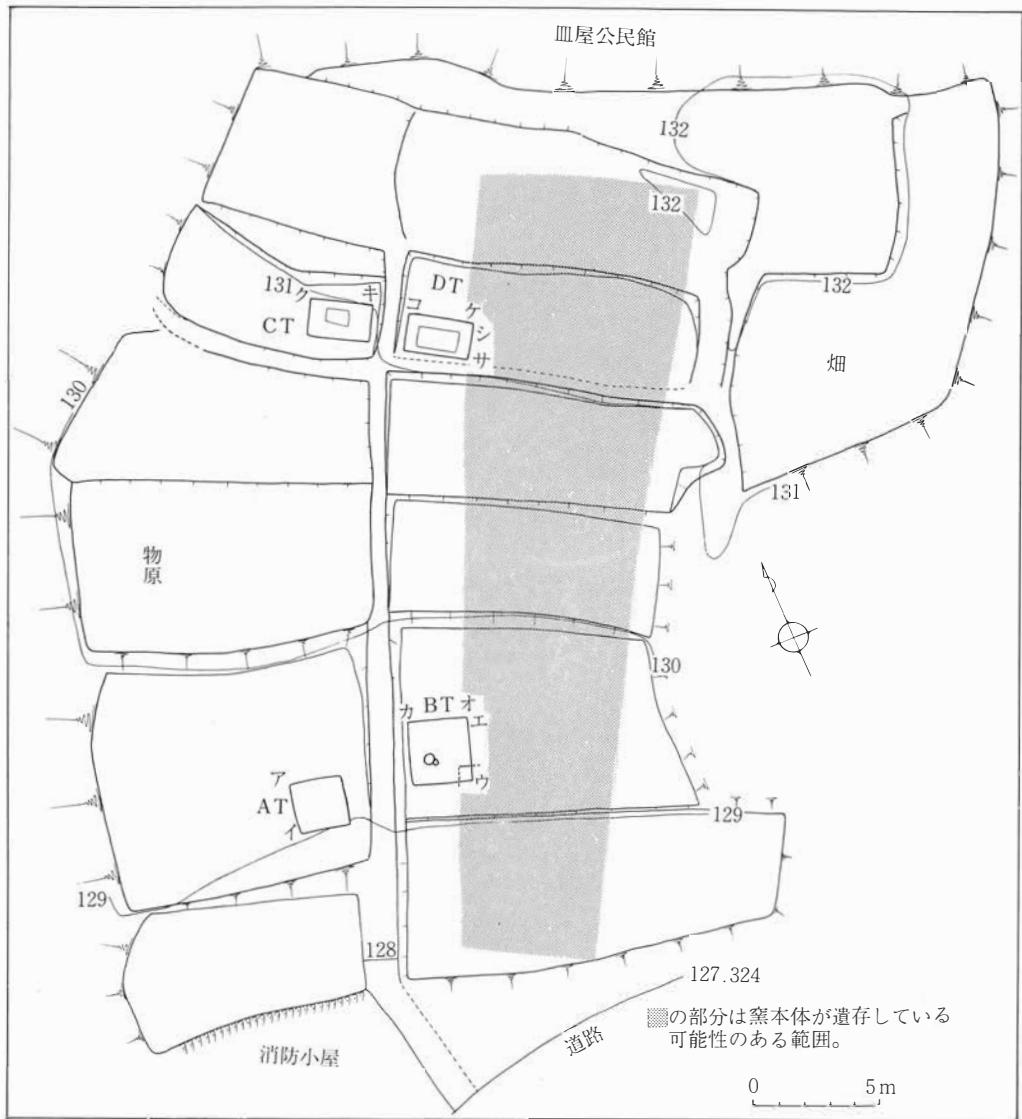


Fig.2 吉田2号窯跡地形図

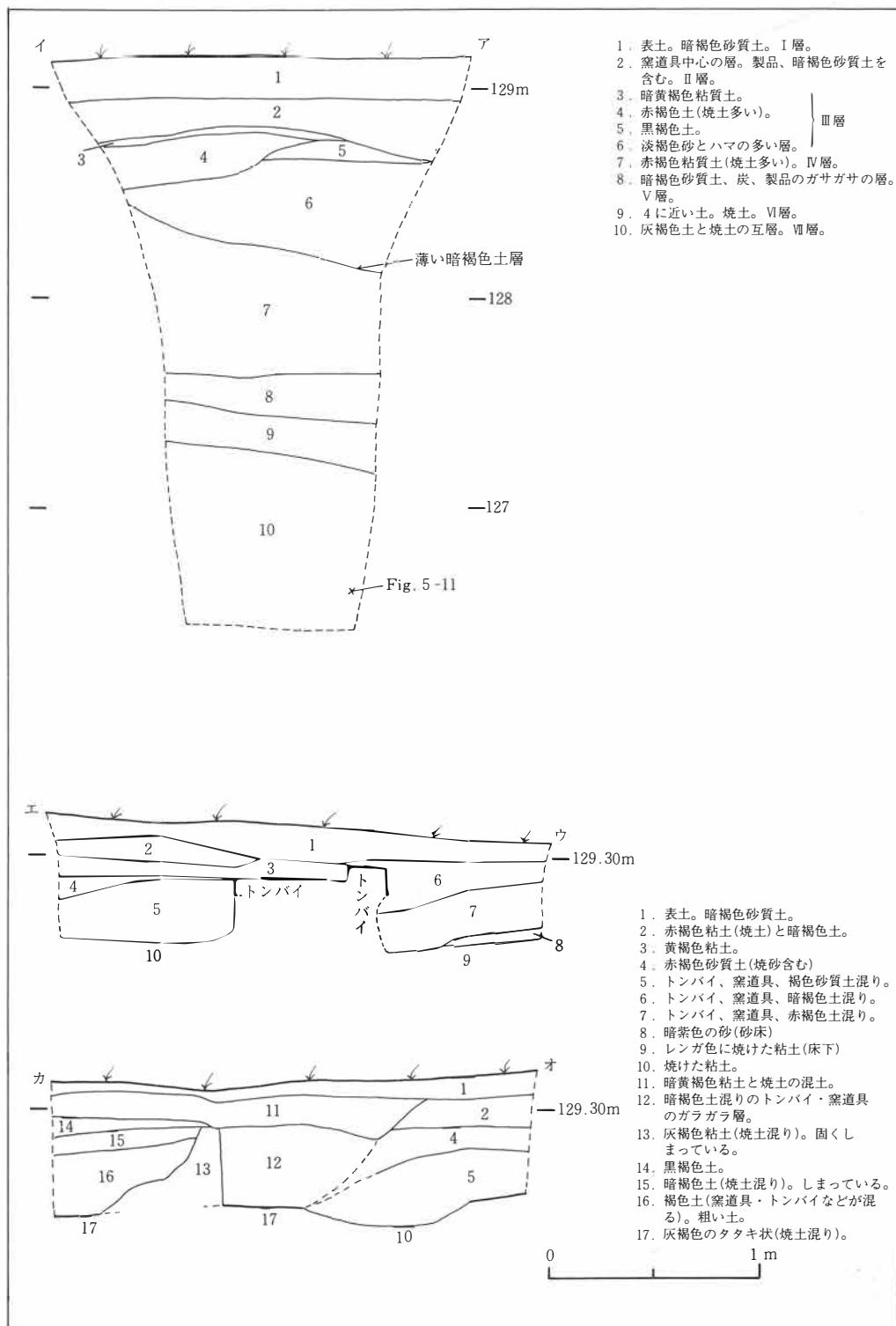


Fig. 3 吉田 2 号窯 AT・BT 断面図 AT (アーアイ)、BT (ウーエ、オーカ)

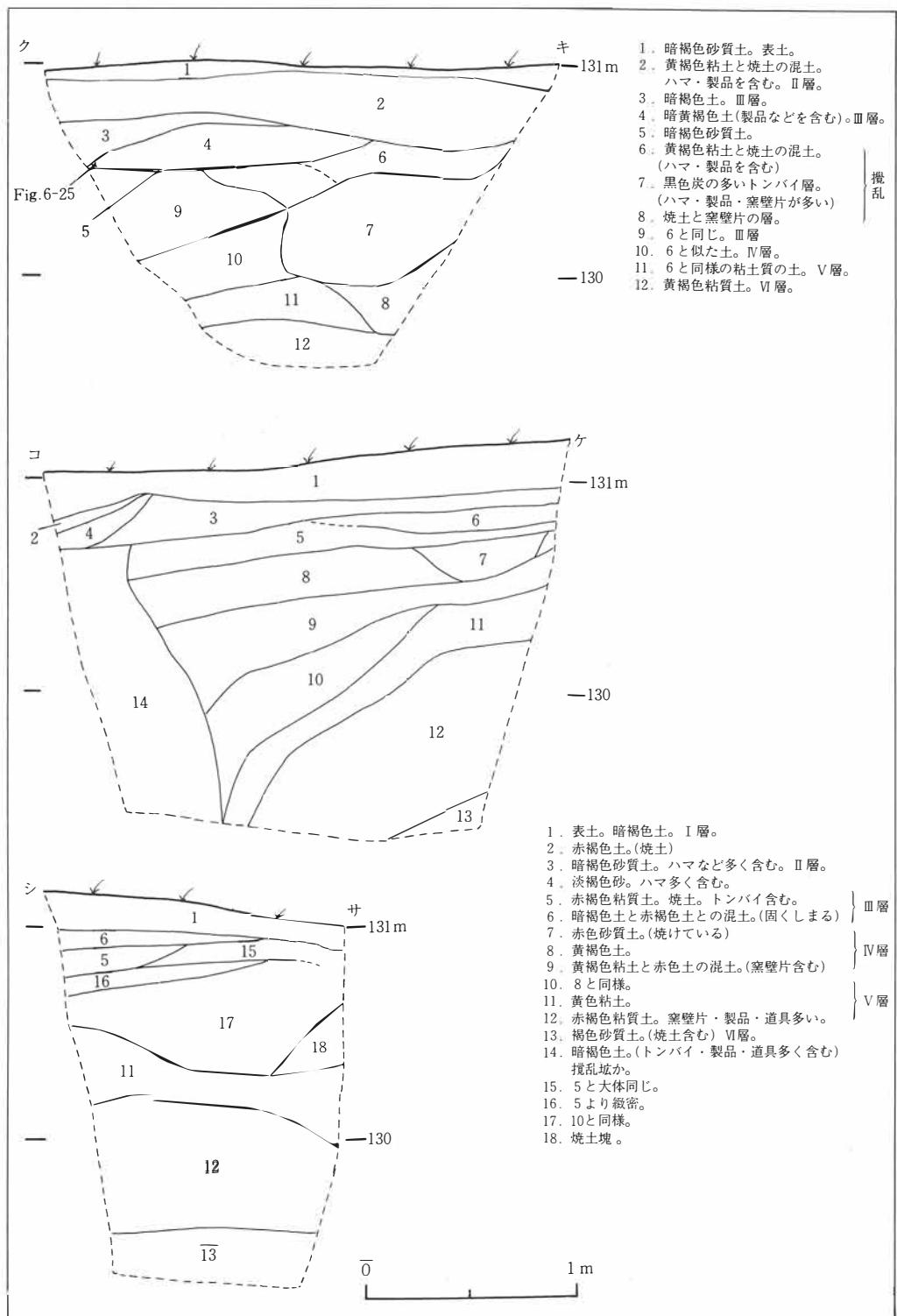


Fig. 4 吉田2号窯CT・DT断面図 CT(キーク)、DT(ケーコ、サーシ)

IV. 遺物

吉田2号窯跡の発掘で出土した製品の種類は、染付がほとんどであり、それに白磁・色絵・青磁が少量ある。明治・大正ごろに比定される製品には釉下彩もわずかにみられる。製品のほかに窯道具が採集された。以下、製品を古い方から順を追って説明しよう。

1. 17世紀後半

この時期の製品には染付のほか、白磁・色絵・青磁がある。器種は碗、小皿、中・大皿、仏飯器、瓶がみられる。

碗には高台内まで施釉したもの (Fig. 5—1、2) と高台部無釉に作るもの (Fig. 5—3～5) がある。2を除けば有田辺の碗に比べてより粗放な作行である。5は青磁と思われるが、釉は暗黄緑色を呈す。

小皿はFig. 5—12を除くと底部を比較的厚く作っている。6・7は見込に柳文、8・9は山水文の一種、10は花卉文、11は見込に「日」字、側面に鳳凰文を描く。Fig. 5—12はこれらの中ではもっとも細い線書きで見込に柳に山水文を染付している。

Fig. 5—13は芙蓉手花鳥文大皿。粗放な作行である。

Fig. 6—14は白磁中皿であり、Fig. 6—15～17は大皿である。口縁部はいくらか外反り気味に作られている。見込周囲は一段小さく削り込んでいる。釉色は灰色が強いものと、灰白色で固く焼き締まったものがある。これらは色絵素地になりうるものである。

Fig. 6—18、19は色絵大皿。Fig. 6—18は印判手仙境図の意匠を赤と緑で上絵付けしている。19は焼成不良の素地に緑で赤絵を施している。

Fig. 6—20は染付仏飯器。底部は無釉である。

Fig. 6—21は染付油壺。草花文を描く。

Fig. 6—22は染付瓶。柳文を描くが、PL. 5—2はFig. 6—18などの色絵大皿と同様の印判文を描く。

2. 18世紀

この時期の製品は染付と白磁である。器種は碗、小壺、小皿、中・大皿がみられる。

Fig. 6—23は染付小碗。コンニヤク印判による染付。Fig. 6—25は染付小壺。草文を描く。Fig. 6—24は猪口ともいえる染付小壺。唐草文を染付。高台内に渦福字銘の崩れたものを描く。

Fig. 6—26～29は染付碗。Fig. 6—26は丸に菊花を描き唐草文で埋める。高台内に渦福字銘を染付。Fig. 6—27、28は外面に二重の網目文、内側面に一重の網目文、見込に菊花文を描く。高台内は渦福字銘の崩れたものを染付している。Fig. 6—29は高台の作りの小さい碗。草花文、雪持ち笹文を描く。

Fig. 6—30は碗の蓋。外面は窓内に松竹梅を配し、周囲を唐草文で埋める。内面中央は五弁花文をコンニヤク印判で表わし、口縁部に四方櫻文を描く。

Fig. 7—31～35は染付筒形碗。この時期の湯飲み用とみられる碗である。いずれも見込には五弁花文をコンニヤク印判で表わす。31、32は捻花状の区画内に唐草文を描く。33は四

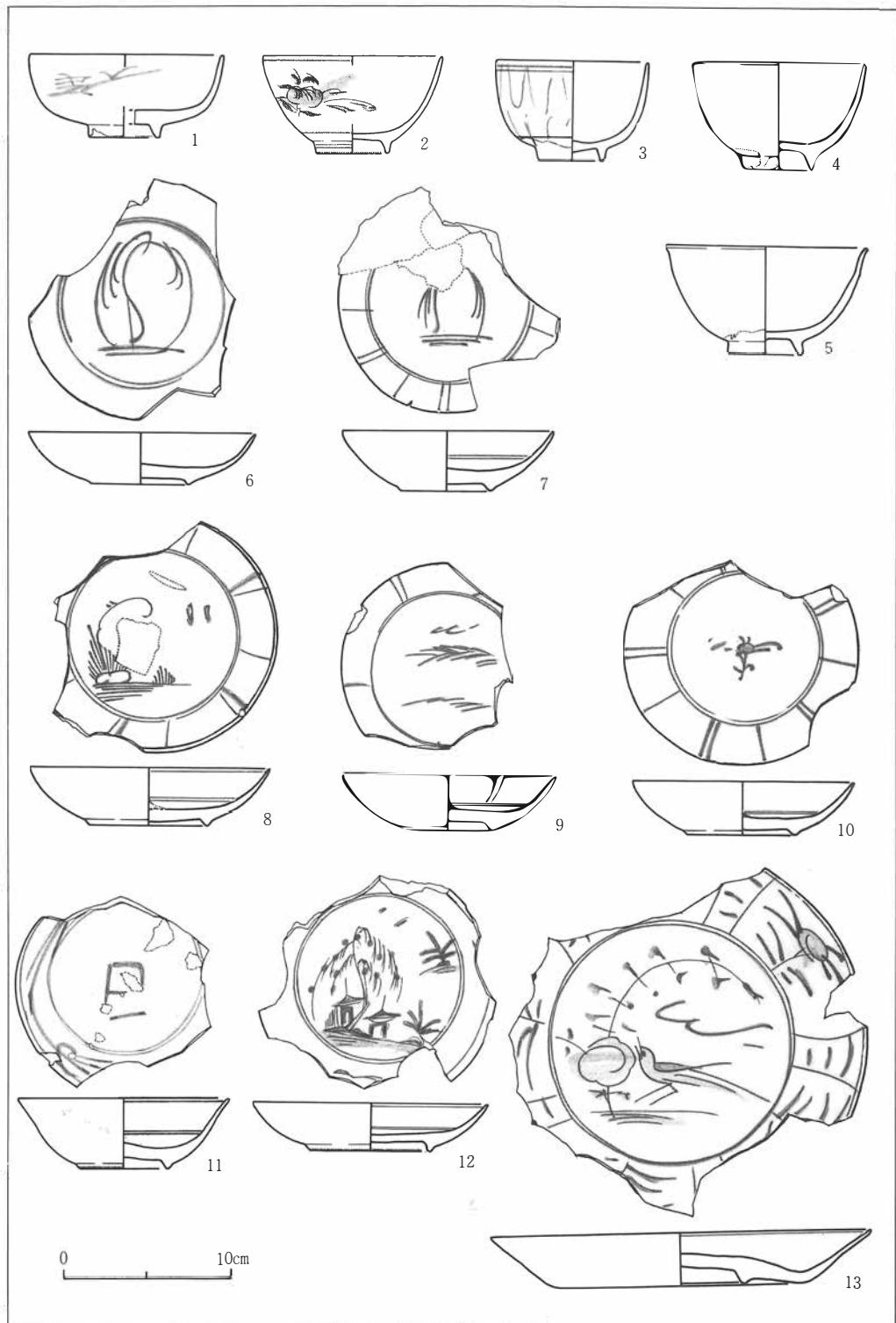


Fig. 5 吉田2号窯出土品(1) 1、4、6～11、13はAT出土。
2、3、5、12はDT出土。

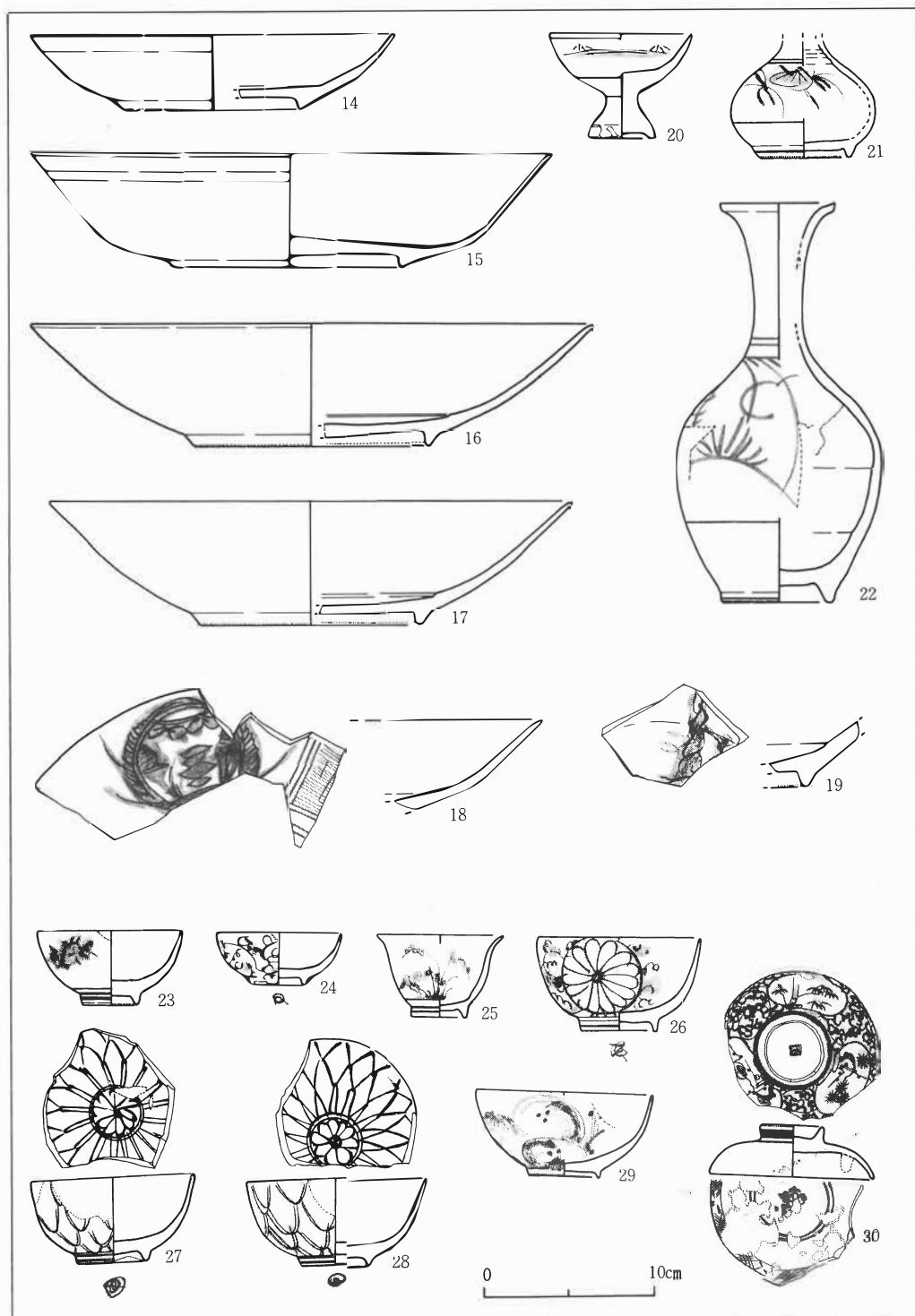


Fig. 6 吉田2号窯出土品(2)
 14~19、21、29、30はDT出土。
 20、22、26はAT出土。
 23~25、27、28はCT出土。

つ目結び文で区画し、その中に草文、34は2本線で区画し、菊花散らし文と宝文と思われる文様を交互に描く。35は七宝文で埋める。これらの筒形碗は広東形碗と併焼される場合が多く、18世紀末から1810年代と推測されるものであるが、34の文様の碗で端反形碗と熔着しているものがあるから、一部で1820年代ごろまで焼き続けられたかもしれない。

Fig. 7-36は染付小皿。見込五弁花文はコンニャク印判によって表わす。側面は唐草文。

3. 19世紀～幕末

この時期の製品は染付だけである。器種は碗、小壺がほとんどであり、小皿が少量ある。

Fig. 7-37～45は染付碗であるが、身は胴部から口縁部へと大きく開き、高台が撥形に開くのが特徴である。肥前磁器全体では主流をなす碗形ではないが、吉田2号窯の場合、多く出土した。類似の碗は広瀬向2号窯（西有田町）物原2層出土品に青磁染付の例がある。Fig. 7-37、38は蓋であり、寿字を散らしたもの。Fig. 7-39、40は福字と丁字文を散らした碗の身。Fig. 7-41は幾何学文様で埋め、見込は宝文を描く。Fig. 7-42、43は草花文を描く碗の身と蓋。Fig. 7-45は山水文を描き、見込に足付ハマの熔着痕がみられる。足付ハマは肥前磁器の場合、18世紀末から用い始めた窯詰めの道具であり、道具自体も出土している（Fig. 11-7）。

Fig. 7-46は染付広東形碗の蓋。側面に竹葉、中央に雀を描く。広東形碗の出土量は少なかった。1780年～19世紀前半。

Fig. 7-47は広東形碗を小型にした碗。1780年～19世紀前半。

Fig. 7-48、49は染付小深丸碗。この時期の湯飲み用とみられる碗である。Fig. 7-48は丸文、49は草文に蝶を描く。1820年～幕末。

Fig. 7-50、51は染付小壺。Fig. 7-50は薄く作られたもので、寿字と二重方形枠内に「吉」字の銘款を染付する。「吉」字は吉田の名からとったのかもしれない。Fig. 7-51は印判文を染付したもの。この意匠は中国磁器の影響とみられる。染付端反形碗と思われる陶片と熔着している。呉須は明るい青に発色している。

Fig. 7-52、53、Fig. 8-54～63は染付端反形碗の身と蓋。Fig. 7-52は宝珠文を描き、上面には「乾」字を染付する。これは清朝の乾隆（1736～95）の1字を取ったもので、この時期に流行した銘の1つ。内面中央は宝文を描く。Fig. 7-53は麻葉文を描き、見込には松竹梅を環状にめぐらした文様を配す。Fig. 8-54は樹木に鳥、55は根引き松に鶴、56は草花に窓絵、57は内面に別の製品とハマが熔着しているので見込文は不明。Fig. 8-58は捻花に「福寿」字を描き内面中央に環状の松竹梅文を配す。Fig. 8-59はクモの巣、60は雲鶴、61は草花、62は木にコウモリ、63は紅葉を描く。これは1820年～幕末。

Fig. 8-64は染付小皿。幕末～明治初ごろと推測される。

Fig. 8-65は染付薬盒の蓋。^{注1}上面に「肥前 烏犀圓」の文字を染付している。これと同様の蓋は有田町年木谷1号窯から出土しており、年木谷で烏犀圓の容器を焼いたことは伝えなどから間違いない。しかし吉田2号窯の場合、1点のみの出土であり、特に窯で焼いた時の傷もなく、蓋の合せ口に摩滅が認められることから、生活で使用したものと捨てた可能性が強い。

4. 明治

この時期の製品は染付と釉下彩、白磁である。器種は碗、小壺、鉢がある。

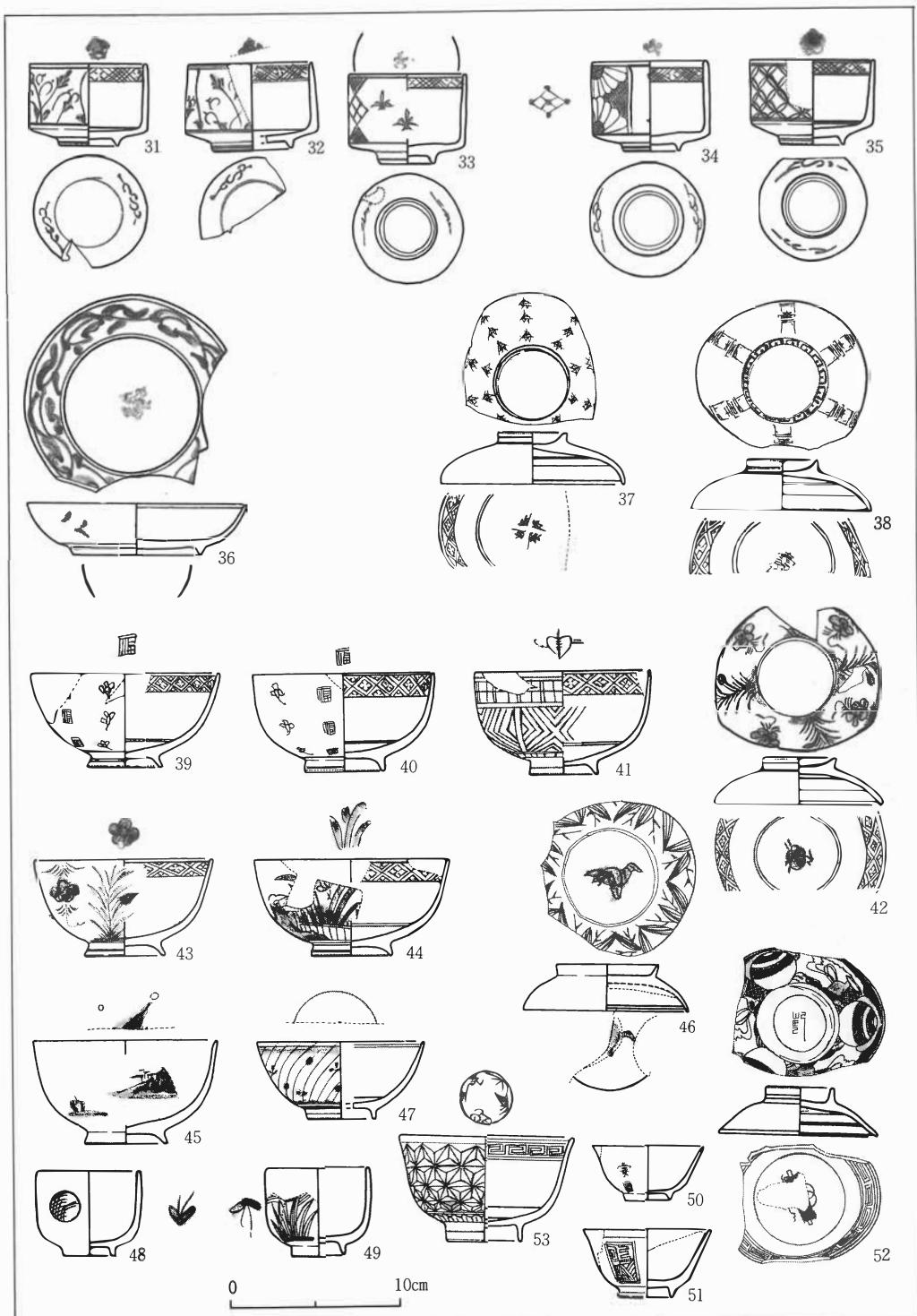


Fig.7 吉田2号窯出土品(3)
 31~35、37~40、42~47、50はAT出土。
 36、49、51~53はCT出土。
 41はBT出土。48はDT出土。

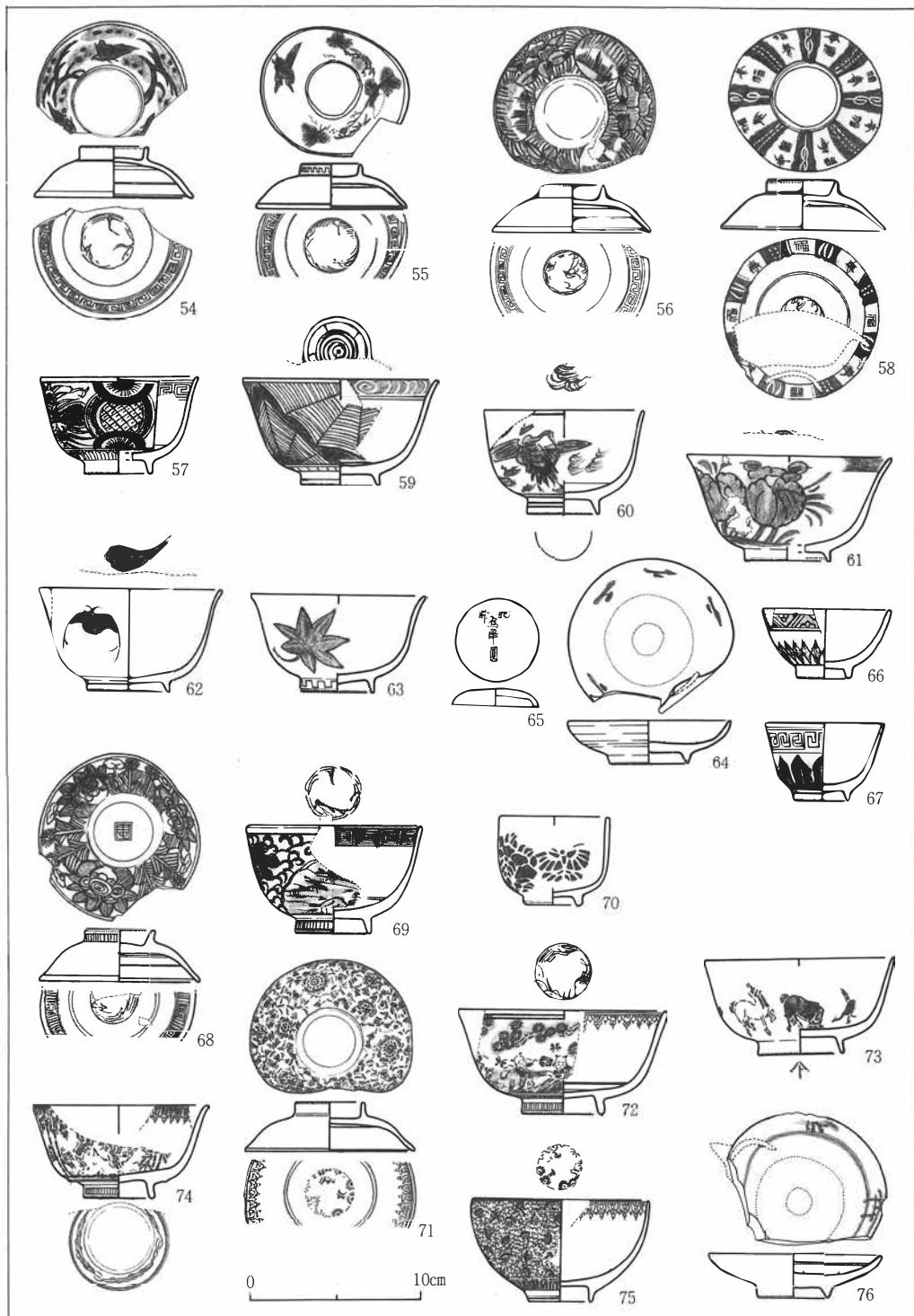


Fig. 8 吉田2号窯出土品(4)

54~58、63~76はCT出土。

59、61、62はAT出土。

60はBT出土。

Fig. 8—66、67は染付小壺。腰部に幕末～明治初からみられる剣先形蓮弁文を描く。Fig. 8—66は鮮やかなコバルトで染付している。

Fig. 8—68は染付端反形碗の蓋。清朝磁器に倣った文様を線書きだけで描く（素書き）。鮮やかなコバルトで染付している。

Fig. 8—69は染付端反形碗。コバルトで窓絵文を染付。

Fig. 8—70～75は型紙摺で染付した碗。Fig. 8—70は1820年代ごろから現われた湯飲み碗の器形。牡丹に蝶を描く。Fig. 8—71～74は端反形碗の蓋と身。Fig. 8—71の蓋は牡丹唐草文、内面中央に環状の松竹梅文を配す。Fig. 8—72は、主文の唐子文は型紙摺で輪郭を染付し、そのうえに濃みを加え、口縁部内面のリンボウ文は型紙摺で表わす。見込の環状松竹梅文、高台の櫛目文は手書きで染付している。Fig. 8—73は群馬文を描き、高台内に窯印とみられるものを染付している。Fig. 8—74は竹虎文を型紙摺で表わす。腰部に凸帯をめぐらし、銹釉を塗っている。高台際に雨竜文、高台に櫛目文を手書きで染付している。Fig. 8—75は丸形の碗。型紙摺で緻密な唐草文の一種を染付し、見込には環状の松竹梅を描く。型紙摺は明治10年代から現われ、大正まで流行した。これらは明治10年代から明治末のものであろう。

Fig. 8—76は染付皿。コバルトで染付。

〈窯跡北西部物原採集品〉

窯跡北西部の崖面に物原の断面が露出しており、おびただしい量の遺物の堆積がみられた。この部分から採集されたものは18世紀から幕末のものが多かった。A T～D T出土品を補うものなどを説明する。

Fig. 9—77～79は高台内に二重方形枠内に渦福字を記した銘を施す染付碗。Fig. 9—78は丸に菊花を染付し、周囲に草花を描く。Fig. 9—79は二重の網目文を染付し、内側面に一重の網目文、見込に菊花文を配す。

Fig. 9—80は高台内に杵なしの渦福字の崩れた銘を記す。流水に草花文を描く。

Fig. 9—81はFig. 9—77～80よりも広口の碗。草花文を描く。見込は重ね積みのための蛇ノ目釉ハギを施す。

Fig. 9—77～81は高台脇に染付線を施したが、Fig. 9—82は高台脇に染付線を施さない碗である。幔幕に梅を描く。

Fig. 9—83は染付小碗。コンニヤク印判による花文を染付する。

Fig. 9—84は一般的な碗形ではなく、嗽い碗であろうか。高台部から口縁部へと直線的に開く。白磁と染付がある。消費地遺跡の出土例で色絵の例が知られるから、これも白磁として出すだけでなく色絵の素地になったものもあるのではないか。

以上の年代は18世紀前半～1780年代。

Fig. 9—85、86は染付筒形小碗。見込に五弁花をコンニヤク印判で表わすが、Fig. 9—86はより崩れた文様になっている。Fig. 9—85は雲鶴文の変化したものと思われ、Fig. 9—86はFig. 7—33と同様だが、底部に焼成時に敷いた薄いタタキハマが熔着している。これらは1780年代ごろから1810年代と推測される。

Fig. 9—87は染付の紅皿であろう。外面に笛文を染付。18世紀。

Fig. 9—88は染付の猪口。アザミ（？）に蝶の文様を描く。18世紀後半から19世紀初のものであろう。

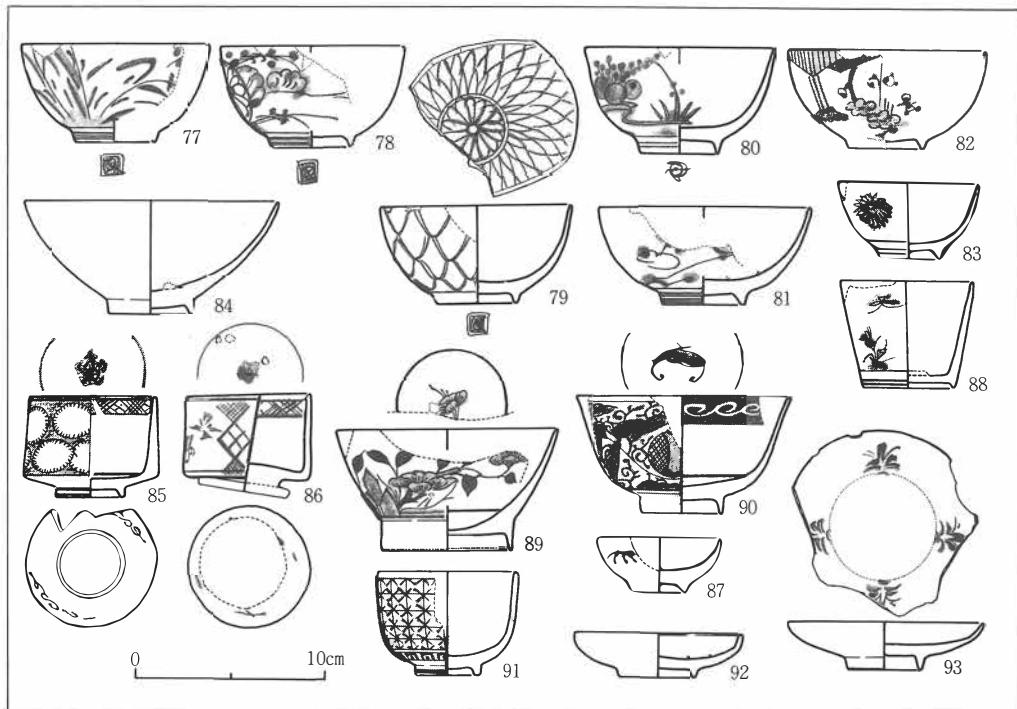


Fig. 9 吉田 2 号窯北西部物原採集品

Fig. 9—89は染付広東形碗。岩に草花文を描く。1780年～19世紀前半。

Fig. 9—90は染付端反形碗。唐草文を描き、見込にはコウモリ、口縁部内面には波涛文を墨弾きによる白抜き線で表わす。広東形碗に比べて口縁部内面に文様帯を設けるのが端反形碗の特徴として指摘できる。1820年～幕末。

Fig. 9—91は染付の深めの小丸碗。四方櫛文から変化した地文様を描く。1820年～幕末。

Fig. 9—92、93は小皿。Fig. 9—92は見込蛇ノ目釉ハギシロ鎌を施した白磁小皿。手塙皿というべきかもしれない。Fig. 9—93は内側面に草文（？）を染付したもの。2点は18世紀末～19世紀前半とみられる。

〈皿屋遺跡横道丁4063〉

吉田 2 号窯の西北80mの建築工事現場で出土したもの。同じところから集中的に出土したという。出土品はコンテナ 3 箱分位あるが、2 号窯下層出土品と共にものが主体であり、その主なものを説明する。

Fig.10—94～96は染付碗。Fig.10—94は簾文、95は網目文、96は山水文を描く。

Fig.10—97は大振りの染付碗。外面に雲竜、見込に荒磯文（跳魚図）、内側面三方に魚文の崩れた文様を描く。

Fig.10—98は白磁大碗。Fig.10—114のように色絵の大碗があるので、これも色絵素地として作られた可能性が強い。

Fig.10—99は染付小壺。外面に山水文を染付。

Fig.10—100は白磁仏飯器。

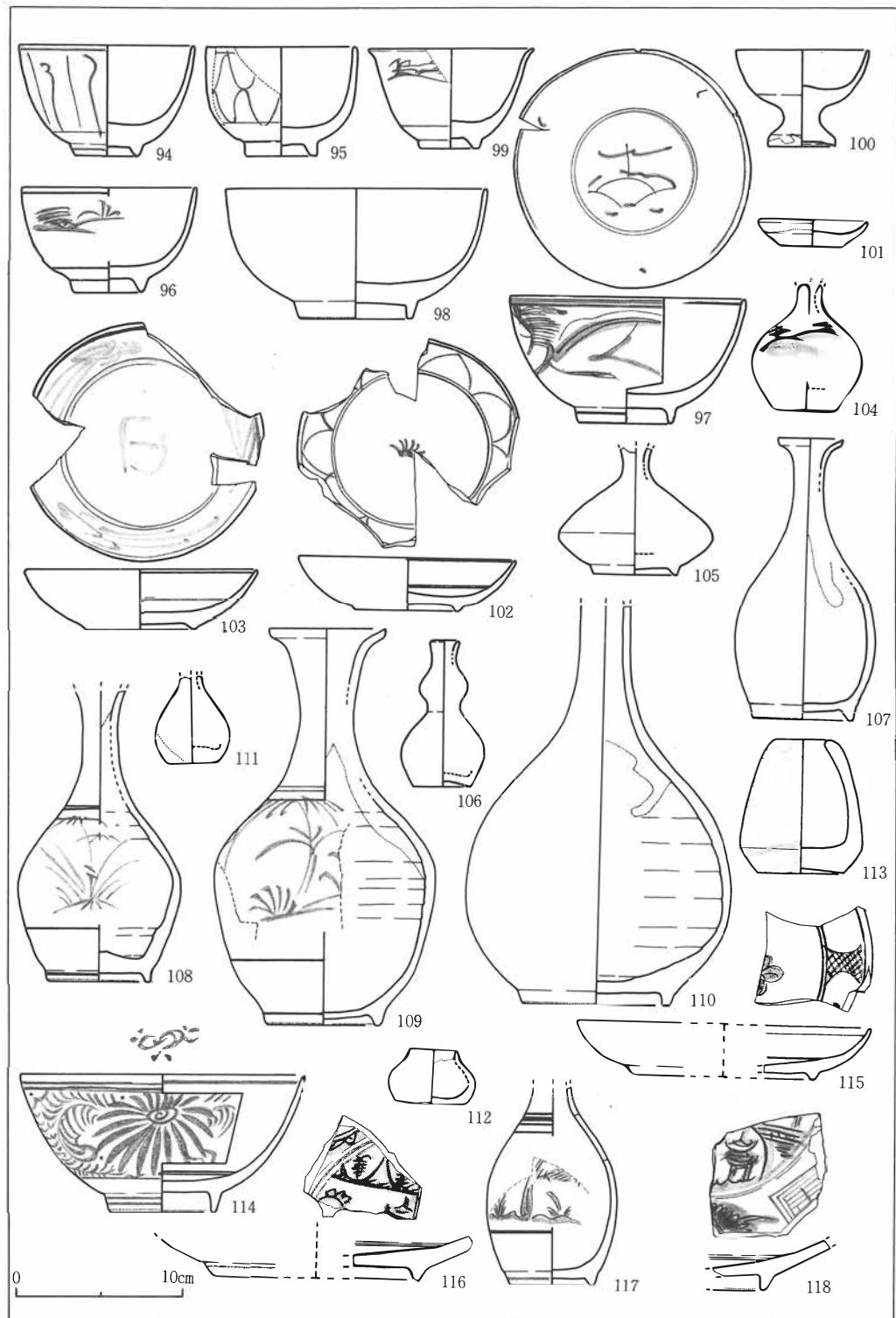


Fig. 10 吉田皿屋遺跡(横道丁4063)採集品

Fig.10—101はミニチュアの小皿。無釉の底部は左巻きの糸切り痕が残る。

Fig.10—102、103は染付の小皿。内側面に蓮弁、見込は花文と思われるものを染付。Fig.10—103は見込に「日」字、内側面三方に鳳凰文を配す。

Fig.10—104は染付小瓶。平底であり、口クロを使わずに削っている。胴部に山水文を染付。

Fig.10—105は油壺と思われる白磁小瓶。

Fig.10—106は瓢形の白磁小瓶。底部はロクロを用いて削っている。

Fig.10—107は白磁瓶。これらFig.10—105～107は色絵素地として作られた可能性が強い。

Fig.10—108、109は染付瓶。Fig.10—108は竹を描き、109は草花を染付している。

Fig.10—110は白磁の大瓶。これも色絵素地であろう。

Fig.10—111～113は特殊な器形のもの。Fig.10—111は、錆釉を掛けたミニチュア瓶であり、平らな底部には左巻きの糸切り痕が残る。Fig.10—112は白磁のミニチュア小壺。底部にはやはり左巻きの糸切り痕がみられる。Fig.10—113は陶器かもしれないが、焼成不良のため出来上がりの状態が明らかでない。斜めに縞文様がみられる小壺。底部はロクロを用いずに削っている。

Fig.10—114～117は色絵である。

Fig.10—114は大振りの色絵碗であり、焼成不良の白濁した素地に外面は菊唐草文、見込は花卉文を、赤を主に描く。高台疊付は茶色に焦げている。この種の赤を多用した菊唐草文の碗・鉢は鹿児島県吹上浜遺跡採集品^{注2}に多く見られ、またインドネシアからの招来品（東京国立博物館蔵）^{注3}が知られる。さらに窯跡では有田町下白川窯の物原から出土している。

Fig.10—115は色絵皿。内側面は窓絵を赤で枠取り、窓間は赤による斜格子文で埋める。

Fig.10—116は色絵大皿。見込は仙境図を緑絵具を主として表わす。見込周囲は一段削り込んでいる。

Fig.10—117は色絵瓶。緑・赤で草花を描く。

以上のものの年代は17世紀後半と推測される。

〈その他〉

Fig.10—118は吉田皿屋で採集された色絵大皿片（個人蔵）。見込はFig.10—116と同様に仙境図を緑で表わし、内側面には赤による印判部分が残る。1650年～60年代。

〈窯道具〉

吉田2号窯物原で出土した窯道具はハマとトチンが主である。18世紀以降とみられる層からはシノや足付ハマ、サヤも出土する。

Fig.11—1～5は1650～60年代ごろとみられる下層出土の窯道具である。Fig.11—1は円板形のハマ、2、3はロクロ成形による逆台形のハマ。底面には左巻きの糸切り痕が残る。Fig.11—4、5はトチン。

Fig.11—6～10は18世紀以降とみられる上層出土の窯道具である。Fig.11—6は円板形ハマ、7は三足付ハマ、8はシノ、9はトチン、10はサヤである。三足付ハマは18世紀末から現われた窯道具、10は型作りのサヤであり、このような形状のサヤは19世紀に現われたものと推測される。

注

1. 佐賀県立九州陶磁文化館『下白川窯・年木谷1号窯』1988。
2. 大橋康二「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論集』陶磁編、平凡社、1985。
3. 注1に同じ。

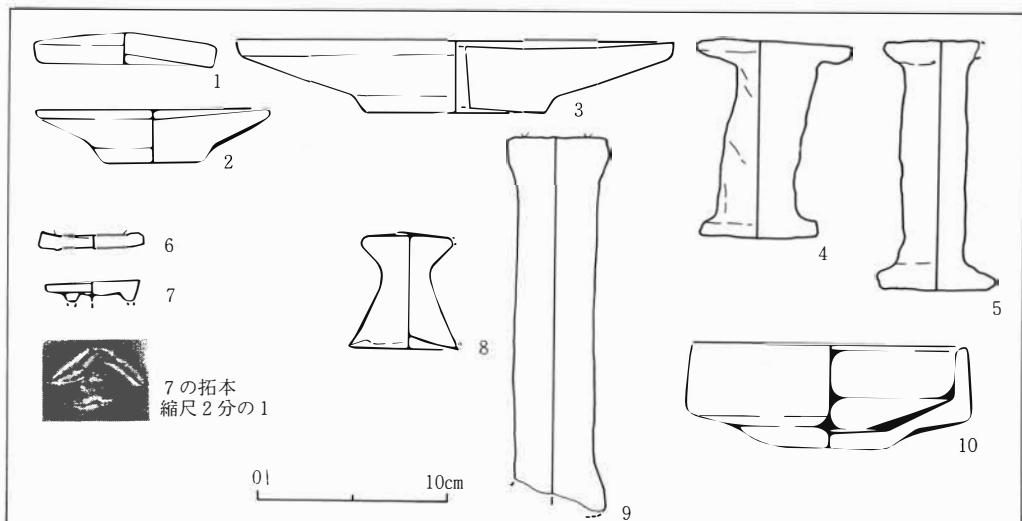


Fig. 11 吉田2号窯出土の窯道具 1、2、4、5、7、10はAT出土。
3はDT出土。6、8、9はCT出土。

ま　　と　　め

確実な記録の上で、吉田山の名の初見は「龍泉寺過去帳」（西有田町）の寛文2年（1662）「吉田山捲左エ門娘、吉田山千右エ門子」であり、その後、寛文7年（1667）まで計7人の名がみえる。寛文7年を最後に「龍泉寺過去帳」に吉田山の人名はないが、元禄4年（1691）に始まる「淨源寺過去帳」（西有田町）に吉田皿屋喜右エ門伯父与右エ門とあり、享保18年（1733）までみえる。このことは吉田山に有田の陶業者が移住したことを物語っている。この記録は発掘結果とも矛盾しない。

吉田2号窯は出土品の年代推定や、「蓮池藩請役所日記」享保12年（1727）に「吉田の儀は六、七十年以来、塩田町の商人ども仕込銀さし出し、焼物とのえ来たり候」とあることから1650年代ごろに始まるとしてよい。1670年代ごろまでの初期の製品は粗放な染付小皿や瓶、碗が主だが、これらは有田の応法地方の窯の製品と共通点が多い。白磁中・大皿もかなり出土したが、これらは応法の隣の山辺田窯のものと似通っている。

吉田2号窯の調査で、初期の物原層からこうした白磁中・大皿と共に、それに赤絵を施した中・大皿片が8点出土したことは重要である。

1650年～70年代に色絵磁器を焼造していたのは、有田皿山以外では石川県の九谷窯と広島県の姫谷窯しか知られていなかった。色絵は有田で1647年ごろに始まったが、このような初期に有田皿山以外の肥前で色絵焼成を行なったことが判った、初の例である。

しかもわずかな面積の調査で、出土品に占める色絵素地と色絵片の割合が高いことは、色絵生産量がかなり多かったことを想像させてくれる。

赤絵窯は発見されなかつたが、付近に赤絵窯が設けられていた可能性は高い。

色絵の内容は、中国明末の呉須赤絵（青呉須）を手本とした印判手仙境図大皿、それに窯跡の近くの工事現場（皿屋遺跡〈横道丁4063〉）で出土した初期の製品を主とする資料の中に赤絵菊唐草文鉢や芙蓉手大皿、瓶がある（7点）。

これらの大皿は、山辺田窯の古九谷様式素地とみられる白磁大皿などと、高台の成形、見込周囲に一段設けている点、素焼きをせずに釉ムラが多いこと、内面の降灰が多いことなど共通点が多い。

また、この時期の吉田2号窯の陶片を化学分析した結果、前述のようにチタン含有量が九谷窯なみに多いことが既に発表されている。一時、チタン含有量の多少が九谷と有田（当時は有田以外の色絵は考えられなかつたので、有田＝肥前として論じられていた）の製品の胎土の違いとして指摘されたことがあった。

しかし同時期に有田以外の肥前でチタン量の高い素地に赤絵を施した大皿を焼いた窯が存在したとなるとこの判定法は使えなくなる。つまり、チタン含有量が少なければ有田産と言えても多いからと言って九谷産とは言えないである。

今回の調査結果は、肥前色絵の歴史の解明に重要な資料を提供すると共に、古九谷問題とも絡む、肥前色絵の幅の広さを示す貴重な発見となった。

吉田2号窯は18世紀になると色絵はみられず、コンニャク印判による碗・小皿などが作られる。中島『肥前陶磁史考』によると、正徳年間（1711～1715）より天草石を使い始め、吉

田の鳴川石と加合して製造するようになったという。

19世紀に入るころから全体に製品の素地は白くなり、端反形碗が製品の中心になってゆく。中島『肥前陶磁史考』には文化年間（1804～1817）に新たに下窯を築造し、さらに新窯を築いたとある。幕末の絵図（PL. 3-3）に3基の登窯が描かれているうち、写真左右の2基が下窯と新窯に当るのであろう。

吉田2号窯の背後には「八天狗 天明三（1783）癸卯六月大吉日上釜」、「天満宮・正八幡宮・稻荷社 天保十二年（1841）辛丑卯月大吉日 当家七代副嶋善左衛門」の石塔がある。

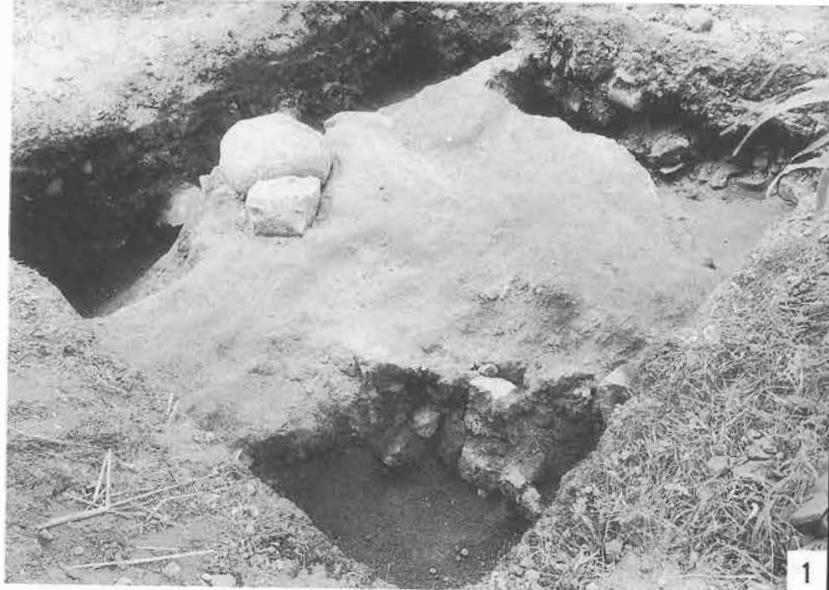
中島『肥前陶磁史考』には明治22年から吉田で朝鮮向製品を焼き、大正時代には好況を呈したことが記されている。とくに大串音松が盛んに製造したらしいが、PL. 9-4の「大乙精製」（型紙摺による染付銘）はこの朝鮮向製品であろう。またPL. 9-5の「大脇□□」、PL. 9-6の「大兼精製」は大正ごろの主要窯焼であった大串脇次、大串兼次の朝鮮向け製品とみられる。吉田2号窯の物原からはこれらの製品よりも新しいものはほとんどみられず、廃窯は明治後半から大正の中で行われたものと推測される。

なお、伊万里で前山博氏が発見した年次不詳の史料に、商人が朝鮮向製品を書き連ねたものがある。この中に大串音松の略称「大音」を記したものがかなりみられる。1例をあげれば、「大音 太白六寸井 三十二入十（俵）二十一円十二銭也」とあり、その単価を符号で6銭6厘と記している。太白井とはPL. 9-4～6のような白磁の井を指すものとみてよい。PL. 9-5、6の口径は17～18cmであるから寸法も矛盾はない。大串脇次については「八天狗 大正五年一月建立 施主大串脇次」の石塔がやはり吉田2号窯の背後に現存する。

PLATES



1. 吉田2号窯跡遠望
(写真中央に窯跡)
2. 吉田2号窯(南西から)
3. 吉田2号窯(北東から)



1



2



3

1. 吉田2号窯焼成室左隅(B T)
(南から)

2. 吉田2号窯物原(A T)
(東南から)

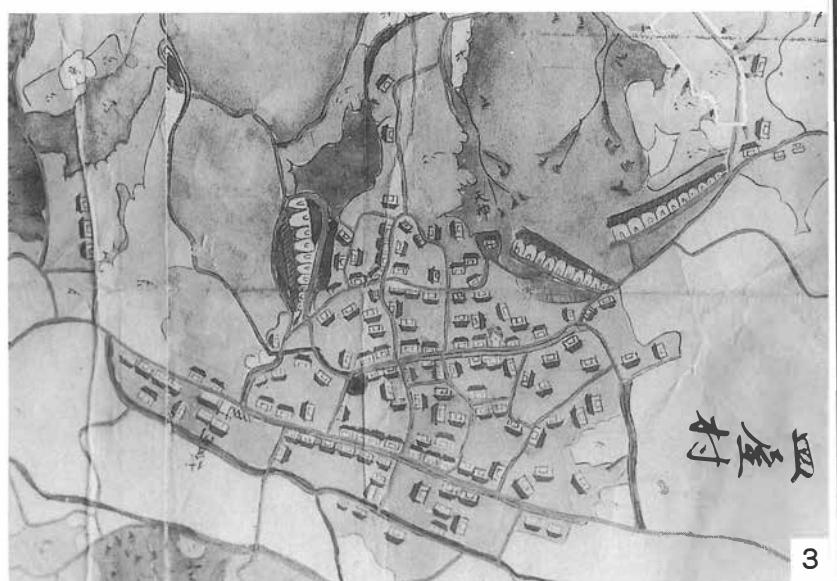
3. 吉田2号窯物原(D T)
(北から)



1

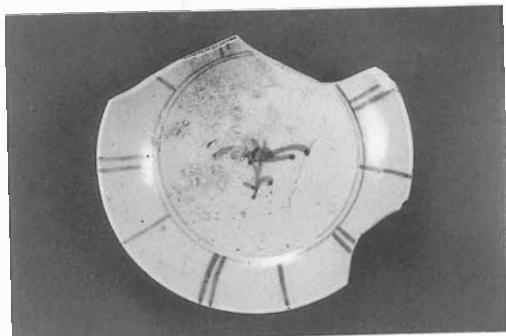


2

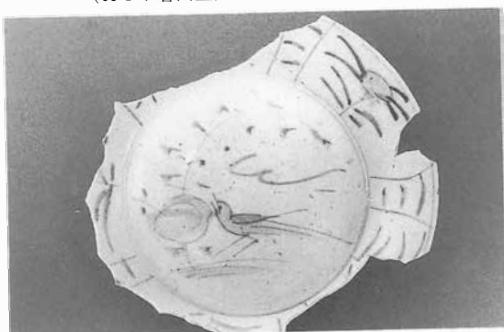
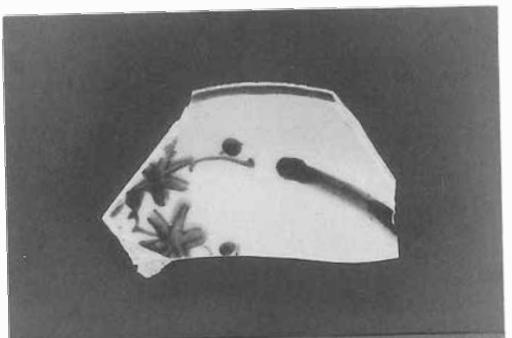


3

1. 吉田 2号窯北西側崖面
(物原の断面)(北から)
2. 皿屋遺跡横道丁4063の
工事現場
(東から)
3. 幕末の吉田山絵図
(佐賀県立図書館蔵)(写真左側が北)



1. 染付花卉文皿
(A T V層出土)



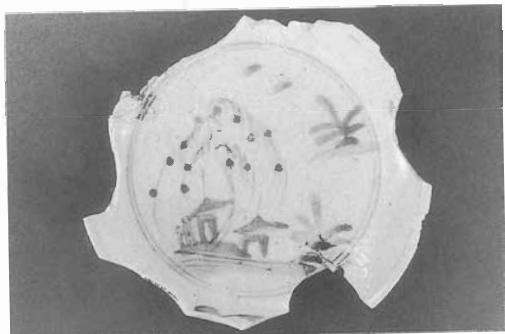
2. 染付芙蓉手花鳥文皿
(A T IV層出土)

3. 染付草花文皿
(A T III層出土)

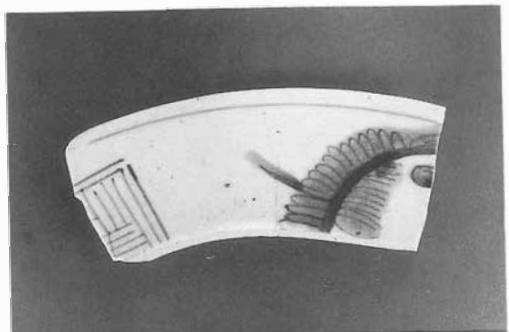


4. 染付竜鳳見込荒磯文鉢
(B T出土)

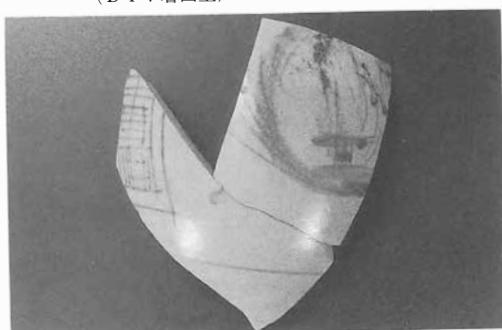
5. 色絵大皿
(C T IV層出土)



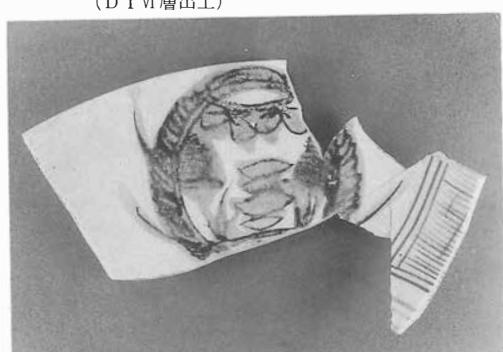
1. 染付柳山水文皿
(D T V層出土)



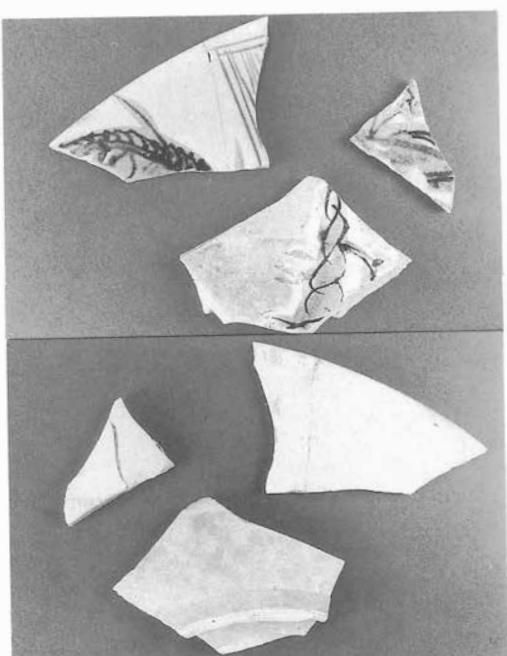
2. 染付印判文皿
(D T VI層出土)



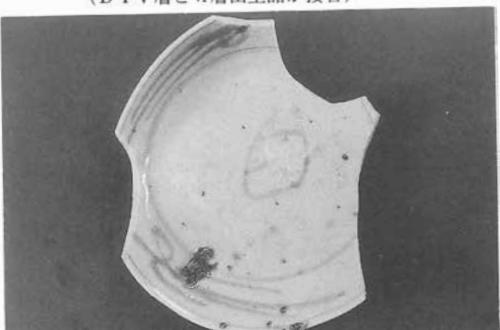
3. 染付印判文瓶
(D T V層出土)



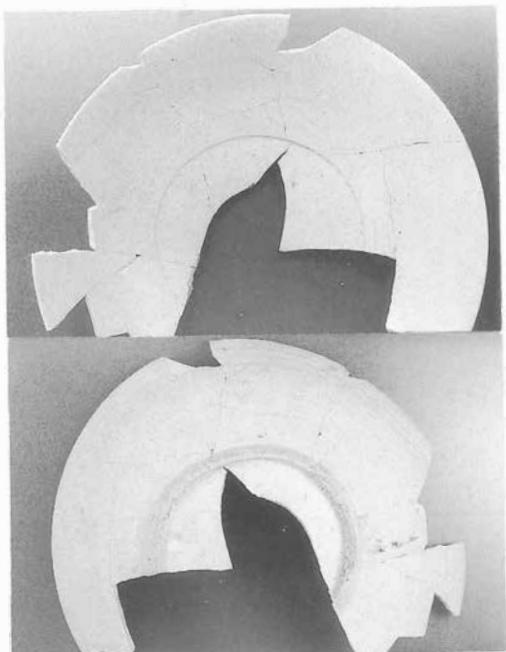
4. 色絵印判手仙境図大皿
(D T V層とVI層出土品が接合)



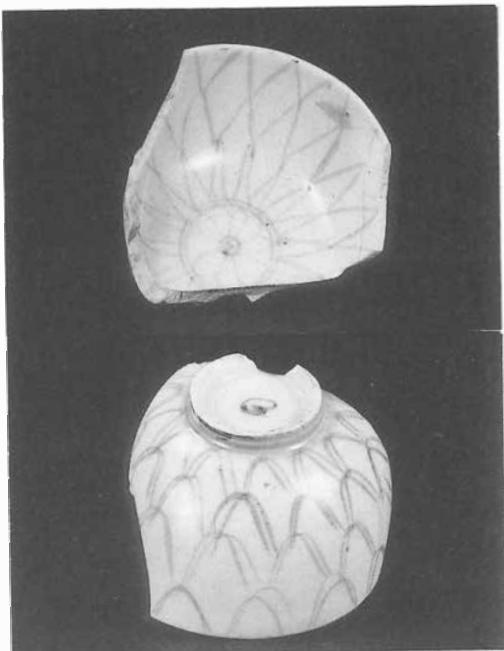
5. 色絵印判手仙境図大皿
(D T V層出土)



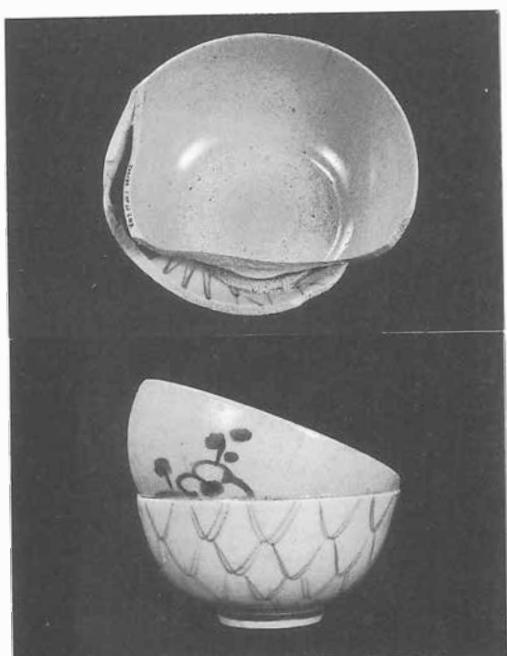
6. 染付日字鳳凰文皿
(D T V層出土)



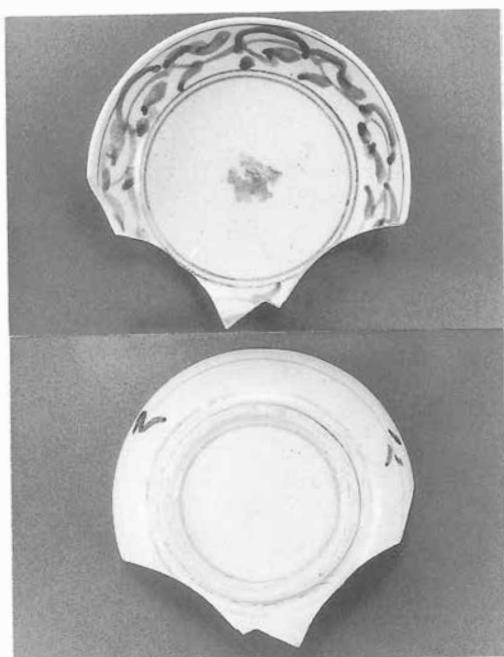
1. 白磁大皿
(D T V層とVI層出土品が接合)



2. 染付網目文碗
(C T IV層出土)



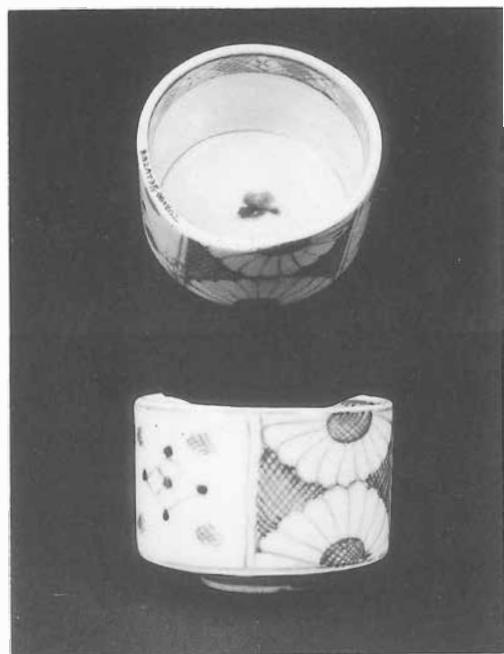
3. 染付網目文碗と梅樹文碗が熔着
(C T III層出土)



4. 染付唐草文皿
(C T III層出土)



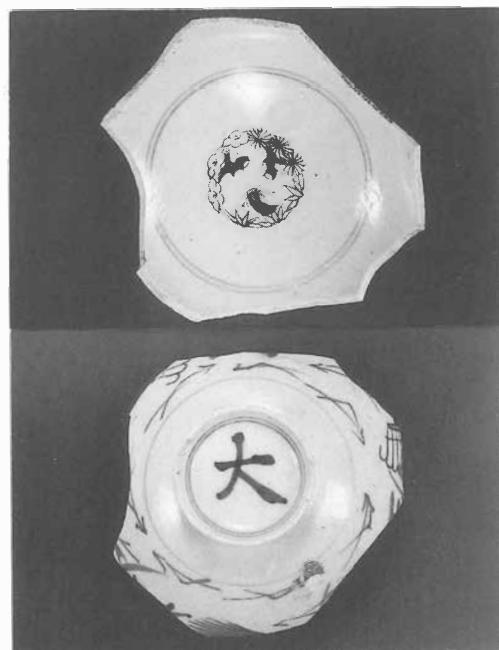
1. 染付ブドウ文皿
(A T III層出土)



2. 染付菊散し文碗
(A T III層出土)



3. 染付福字文碗
(A T III層出土)



4. 染付松葉に熊手文碗
(A T III層出土)



1. 染付竹に雀文広東形碗蓋
(A T III層出土)



2. 染付寿字文小坏
(A T III層出土)



3. 染付宝珠文端反形碗蓋
(C T IV層出土)



4. 染付皿(染付小坏と熔着)
(C T IV層出土)



6. 染付蓮文小坏
(C T II層出土)



5. 染付印判文小坏
(C T IV層出土)



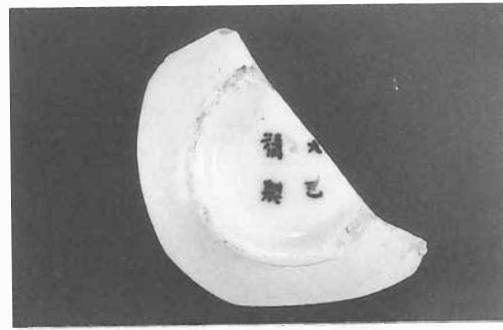
1. 染付烏犀圓藥盒
(C T IV層出土)



2. 釉下彩銅版転写菊文碗
(A T II層出土)



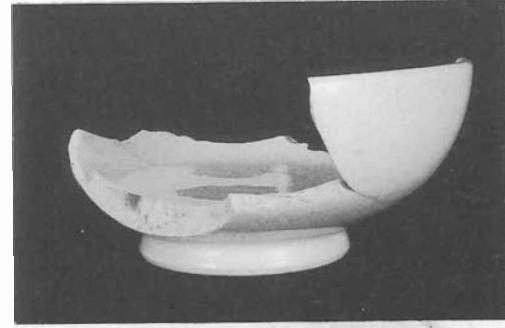
3. 釉下彩碗
(A T II層出土)



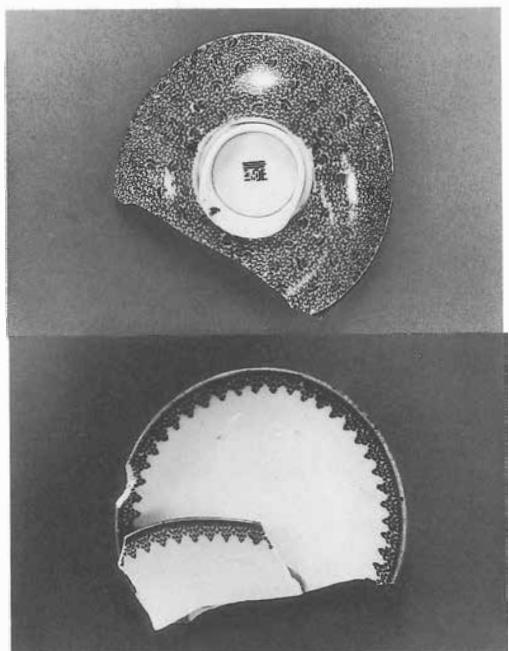
4. 白磁鉢(「大乙精製」銘)
(A T II層出土)



5. 白磁鉢(「大腸□□」銘)
(A T II層出土)



6. 白磁鉢(「大兼精製」銘)
(A T II層出土)



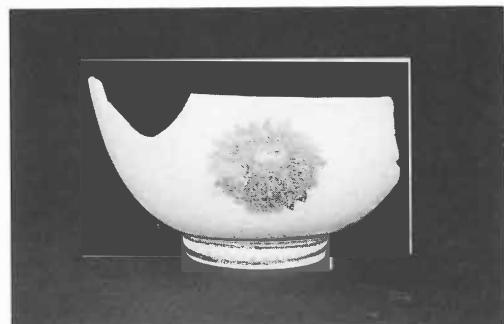
1. 染付型紙摺唐草文碗蓋
(C T出土)



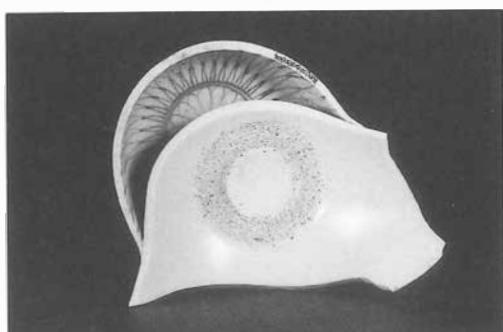
2. 染付型紙摺群馬文碗
(C T出土)



3. 染付碗
(2号窯北側崖面採集)



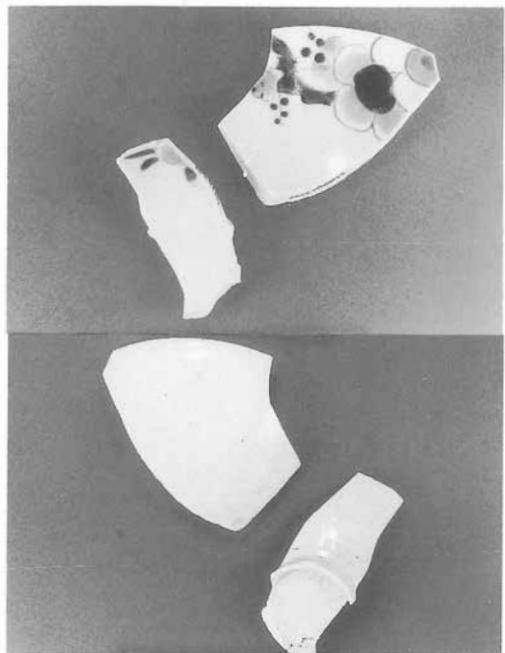
4. 染付コンニヤク印判菊文碗
(2号窯北西側崖面採集)



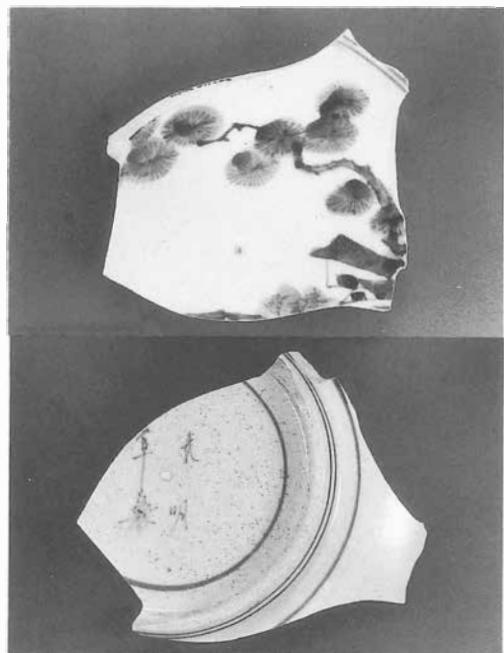
5. 染付網目文碗と白磁嗽い碗が熔着
(2号窯北西側崖面採集)



6. 白磁嗽い碗
(2号窯北西側崖面採集)



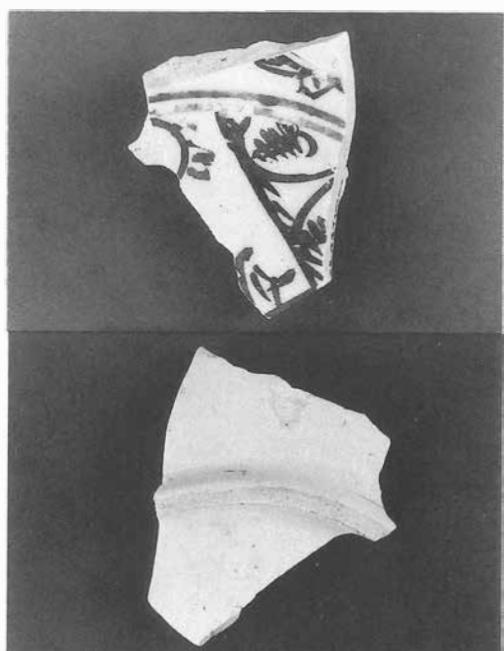
1. 染付梅樹文嗽い碗
(2号窯北西侧崖面採集)



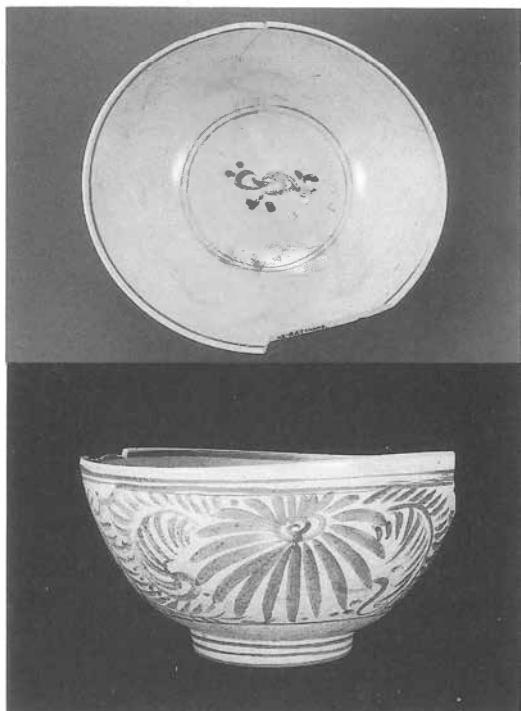
2. 染付山水文皿
(2号窯北西侧崖面採集)



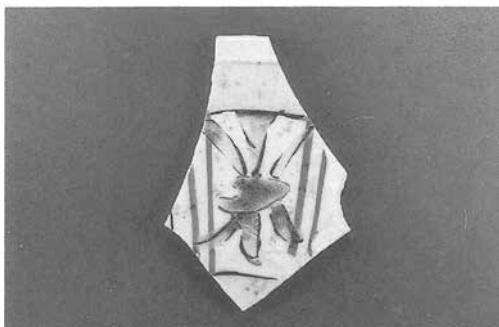
3. 染付雲竜見込荒磯文碗
(皿屋横道丁4063採集)



4. 色絵仙境図大皿
(皿屋横道丁4063採集)



1. 色絵菊唐草文碗
(皿屋横道丁4063採集)



3. 色絵芙蓉手大皿
(同上)



4. 色絵印判手仙境図大皿
(皿屋採集)

肥前地区古窯跡調査報告書 第6集

嬉野町吉田2号窯跡

平成元年3月31日

発行 佐賀県立九州陶磁文化館
佐賀県西松浦郡有田町中部田ノ平乙3100-1
TEL 0955-43-3681
印刷 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里甲2476番地2